

八朔や身にいくたびのいなびかり

藤田湘子

「八朔はっさく」とは、陰暦八月朔日（ついたち）の称。国語辞典によれば、「徳川家康江戸入府の日」にあたり、江戸時代には諸大名・旗本は白帷子を着て登城し祝詞を述べたとも記されている。農家では豊作祈願の行事が古くから行われてきた。

一日ついたちは、何事によらず切りの良い出発の日。湘子にとって昭和五十八年九月一日は、二月から始めた「十日句」の修行が半年を過ぎ、新たな出発日でもあった。

「身にいくたびのいなびかり」とは、自分に降りかかる天命とも取れるが、豊年を期待する再出発の祈願の一句とも思えた。「変わらなければ、停滞する」常に旗幟鮮明に、自分を弟子たちを鼓舞し続けた湘子であった。